様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０４１２４

研究課題名（和文）子どもの性暴力の被害－加害に対するグッドライフアプローチを用いた心理・教育的介入

研究課題名（英文）Psychological and Educational Intervention based on Good Life Approach to sexual behavior problems in childhood

研究代表者
野坂　祐子（Nosaka, Sachiko）

大阪大学・人間科学研究科・准教授

研究者番号：２０３７９３２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：　性暴力は発達への深刻な影響をもたらすため、早期の適切な介入が求められる。子ども間の性暴力においては、被害と加害の双方の子どもへの対応が不可欠であり、保護者や教員を対象とした情報提供や研修等が果たす役割は大きい。そこで、性暴力に関する基盤的理論であるグッドライフ・アプローチに基づき、被害と加害のそれぞれの子どもに用いることのできる心理教育教材と、施設内での性問題行動に関する情報と支援の方向性を示した教材の2種類を開発した。また、児童養護施設と支援学校での事例検討、児童自立支援施設入所児童を対象とした心理教育プログラムを実施した。さらに、フィンランドの性教育実践者養成について調査を行った。

研究成果の概要（英文）：Since sexual assault against children has a serious effect on their development, appropriate early intervention and support are required. Also, with regard to sexual violence among children, to deal with victims and offenders, support and education for families and teachers are also necessary. In view of this, in recent years, based on the Good Life approach, which is gaining attention as a fundamental theory of sexual assault, psycho-educational materials can be used for each child of sexual victims and offenders. We developed two kinds of materials showing information on problematic behavior and direction of support. In addition to conducting case studies at support schools and child care facilities, we continued to conduct a psycho-education program targeting female juvenile delinquents.

研究分野：教育心理学

キーワード：性暴力　心理教育　グッドライフアプローチ

１．研究開始当初の背景

近年、子どもに対する性虐待や性犯罪など、広く性暴力に関する問題について、児童虐待の防止等に関する法律の改正や犯罪被害者等基本法の制定などの社会的な動きを背景に、被害児童の保護件数の増加やメディア報道等によって、一般社会の関心が高まっている。それに伴い、その実態と深刻さが明らかにされてきた。児童福祉施設や学校内での子ども間の性暴力も顕在化されつつあり、子どもの性暴力のなかには性被害体験に影響された性的言動（sexualized behavior）も含まれ、性問題行動（sexual behavioral problem, harmful sexual behavior）の理解と対応においては、被害と加害の双方の観点をふまえて、そのつながりや関連を検討する必要性がある（Friedrich et al., 1991;Johnson, 1996；八木・岡本，2012；藤森・野坂，2013 ほか）。

幼少期の性被害体験は、子どもの性的な価値観を混乱させ、自尊心の低下や対人関係の問題等を引き起こしやすいことが従来の研究からも知られており、派生的な問題行動への進展を予防するためにも、早期の適切な介入が欠かせない。また、具体的な介入法が確立することで、支援者のみならず学校教員や施設職員、保護者など、子どもの身近な大人に対応の方向性を示すことができ、子どもにとって有益であるだけでなく、大人の無力感や養育に対する自信の低下を改善することも期待される。

このように性暴力に対する取組みは社会的ニーズが高く、子どもの発達における重大な問題の一つであるものの、被害と加害の関連性に着目した研究や取組みは少なく、学校現場や児童福祉領域ではどちらの対応にも苦慮している実情がある。子どもの育ちの場である学校や施設が、子どもの回復や治療教育に果たす役割は大きく、そこでの教員や職員等の働きかけが子どもに影響する。

現在、性的トラウマ体験のある児童へのエビデンスのある心理療法としてトラウマフォーカスト認知行動療法（TF-CBT；Cohen et al., 2004/2014;2012）の症例が日本でも報告されつつあり（亀岡ら，2013）、性加害児童への治療教育（Kahn, 2001/2009；藤岡，2006）の実践も重ねられている。性加害の治療教育プログラムは TF-CBT の構成要素を含めて改訂されてきており、被害と加害の児童への支援要素は重複するものである。また、治療教育においてエビデンスが認められているリスク－ニード－反応性原則（RNR モデル；Andrews and Bonta, 2006）をベースに、ポジティブ心理学の流れから性加害行動の背景にある本人の真のニーズの充足を目指すグッドライフモデル（GLM；Ward et al., 2007）が広まりつつある。GLM の思春期版（GLM-A；Print et al., 2013）では、加害児童のみならず知的障がい児や被害児童への適用可能性も示唆されている。

これらの臨床研究の動向から、子どもの性暴力への介入アプローチとしては、被害と加害双方の児童へ GLM-A にもとづくグッドライフアプローチが有効であると考えられ、教育や福祉現場での導入が待たれている。

２．研究の目的

子どもへの性暴力においては、しばしば子ども同士の関係性のなかで生じるものが含まれ、被害と加害の双方の子どもに対する介入支援を検討する必要がある。いずれも、子どもの発達や成長、回復の促進が目指され、再加害の予防とともに、被害から加害に転じる性暴力の連鎖を断つための取り組みが求められる。そのため、子どものトラウマに着目するとともに、海外において被害と加害双方の子どもへの有益性が指摘されている思春期版グッドライフアプローチ（Print ed., 2013）による支援実践と評価を行うことが、本研究の目的である。

実践研究として、下記の取り組みを行う。

1）グッドライフアプローチを取り入れた心理教育マテリアルの開発

2）性暴力被害児童に対する支援実践として、
①グッドライフアプローチによるアセスメントと支援過程の検討
②トラウマに関する心理教育を取り入れた思春期向けグループプログラムの実践と効果評価

3）子ども間の性暴力に関する取り組みや支援者育成に関する文献研究と海外調査、介入事例の検討

なお、本研究の実施においては、これまでに性被害と性加害の児童や支援者（教員・職員・援助職等）を対象に行ってきた研究成果をふまえて展開されるものであり、研究の連続性や発展性を有している。

３．研究の方法

上記２．の目的に沿って、それぞれ以下の研究方法を用いる。

1）児童相談所の職員等、性的虐待や性被害の事例に対応している実践家とのネットワーキングを構築し、グッドライフアプローチの概念を低年齢児にも適用させるための留意点等について検討し、児童福祉現場で活用できるリーフレットの試作と評価、作成を行う。

2）性暴力被害児に対する支援実践において、
①研究協力機関（学校及び施設）において、グッドライフアプローチ等に関する教員向け研修を実施したのち、児童生徒の問題行動と課題、支援計画をグッドライフアプローチから検討し、支援経過の評価を行う。
②児童自立支援施設の入所児童を対象としたグループワークの計画と実施を行い、前後の質問紙調査等により効果評価を行う。

3）性に関する支援の方向性や支援者養成の取り組みを検討するために、性教育について先進的な取り組みを行う北欧フィンランドでの視察と研修、及び資料整理を行う。

なお、研究方法のうち、児童生徒を対象とした支援実践や事例検討に関しては、大阪大学大学院人間科学研究科倫理委員会における審査を受け、許可を得ている。また、結果の発表等に関しては個人情報等の扱いに十分な注意を払う。

４．研究成果

上記２．の目的に沿って、研究成果について、報告する。

1）グッドライフアプローチを取り入れた心理教育マテリアルの開発

1 年目に、子ども間の性暴力に関する文献調査を行い、①子どもの性問題行動のアセスメントにおいては、健全な性的発達に伴う性行動との判別が重要である、②性行動を連続体として捉え、性を用いた攻撃行動のみならず、不適切な性的対処や非対等な関係性にも注意を払う必要がある、③行動化の背景にあるニーズを把握し、問題行動の抑制や禁止ではなく、向社会的な方法でニーズを満たす支援が有益であること等が把握された。このうち③は、グッドライフアプローチと重複する方向性であり、性問題行動の介入においては、子どもの身体的健康、精神的健康、性的健康、自分らしさ、楽しみ、達成感、目的、人間関係（GLM-A；Print et al., 2013）のグッドライフニーズの充足状態に対する子ども自身の自覚と充足のための支援が求められる。

また、性問題行動を予防する環境的な保護要因（Silovsky & Swisher, 2007）等を参照し、2 年目に、(a)子ども間の性問題行動の対応にあたる施設職員向けの心理教育リーフレット と（b）被害・加害を問わず児童・思春期の子どもが自記式で記入できるグッドライフニーズのセルフチェックシートの 2 種類を作成した。試作段階においては、複数の施設および入所児童等からのフィードバックを得て、文言等の修正を行った。

成果物については、ホームページで公開し、ダウンロードできるよう設定した。

2）性暴力被害児童に対する支援実践

①グッドライフアプローチによるアセスメントと支援過程の検討

性的虐待や性被害など、トラウマ体験をもつ子どもが多く入所する児童養護施設において、職員研修及び事例検討を行い、それらの評価を実施した。研究対象施設においては、計 3 回の職員研修（レクチャー1 回、ワークショップ 2 回、いずれも 1～2 週間に 1 度の頻度、各回でアンケート調査を実施）のあと、3 カ月後のフォローアップ研修とアンケート調査を実施した。のべ 71 名が参加した。

介入前後の職員の意識として、子どもの性の態度について、「子どもの性問題行動の改善の見込み」に関する肯定的な評価の割合が 42%から 70%へと変化し、「子どもの性に関わる対応することへの抵抗感」に関する否定的な評価の割合は 37%から 24%に変化した。

また、性加害児童に対するアセスメントシートの作成と記入例を示した。本調査の詳細は、野坂祐子・浅野恭子（2016）にまとめた。

さらに、性被害のリスクが高く、性問題行動への対応が困難と捉えられやすい知的障がいのある生徒について、グッドライフアプローチによるアセスメントの活用可能性を検討するために、支援学校（高等部）の協力を得て、男女生徒の事例検討を実施した。

知的障がいのある思春期の子どものグッドライフニーズが阻害されやすい背景要因には、認知能力（できごとの理解困難）、対処スキル（限られた対処スキル）、言語化能力（感情表現の機会不足）、他のトラウマ（いじめ、境界線を侵害される体験）不適切な養育（保護者の障害受容の困難さ）、不十分なスキル教育（適切な指導や支援不足による逸脱行動の許容）、対人関係（トラブル、寂しさ、孤立感）、発達理解（認識不足・誤解）、社会資源（性や障害の専門支援不足）があると考えられた。また、性的トラウマによる行動化がみられた生徒への支援過程においては、行動の背景にある性被害体験の影響を理解するというトラウマインフォームド・ケア（Trauma Informed Care:TIC)の観点が必要であり、思春期以前の親子関係や喪失体験、被害体験が感情発達に及ぼす影響を把握し、親子関係の改善や安全な学校生活を基盤とした TIC にもとづく支援が有益であった。本調査の詳細は、第 16 回 日本トラウマティック・ストレス学会（2017）で発表された。

②児童自立支援施設の入所児童を対象としたグループワークの計画と実施

虐待や性非行等を主たる理由として児童自立支援施設に入所している女子児童（主に中学生）を対象に、グッドライフアプローチと TIC を取り入れた各回 90 分、全 6 回の心理教育プログラムを実施した。3 年間の継続実施により、のべ約 90 名の児童が参加した。「よりよいコミュニケーション」をテーマに、アサーティブスキルを身につけることを課題としているが、対人関係で否定的な認知や行動をとりやすい傾向について、トラウマの観点から心理教育を行い、感情の開示や認知の修正、安全スキルとしてのコミュニケーション（相談等）を促すものとした。

介入の前後評価として、信頼感に関する尺度（天貝,1995;1997）とソーシャルスキルを測定する Kiss-18（菊池, 1988）を用いたところ、3 カ年ともソーシャルスキル得点の有意な向上がみられ、2016 年度の実施時は、自分や他者への信頼感の変化も有意傾向がみられた。また、個別の児童の変化や課題を把握するために、施設職員との検討を行った。

3）子ども間の性暴力に関する海外調査等

子ども間の性暴力に関する事例や取り組み、課題等について国際学会で報告し、メディアの影響や子どものメンタルヘルス全般に関する意見交換を行った（Nosaka,2016)。

また、性被害や性問題行動の理解や介入に関して、性の健康（sexual health）や倫理（ethics）の観点から検討するために、性教育において先進的な取り組みを行っているフィンランドの専門家との情報交換を行い、性教育実践者養成において豊かな実績を有する Sexpo 財団（ヘルシンキ市）を訪問し、視察および情報収集を行った。性教育や性の支援が教育システム全体のなかでどう位置づき、機能しているのかを把握するために、教育庁にも訪問し、フィンランドにおいては、幼児教育から大学の高等教育まで一貫して、系統的な健康教育と権利や倫理に関する教育が行われ、なかでも境界線（boundary）が教育活動において重視されていることが把握された。視察調査のまとめについては、「性の健康」誌における野坂（2018）に詳しい。

以上の取り組みから、本研究においては、次の 3 つの成果を挙げることができたと考えられる。

①研究・実践をベースとした実用的な心理教育用のツールを開発できた。とくに、施設職員用に子ども間の性問題行動に関する情報提供を行えたことは、危機対応時だけでなく、危機予防としても活用できることが期待され、性暴力の防止につながる安全な環境作りの指針を提供できたと考えられる。

②児童養護施設や支援学校など、性被害や性問題行動への対応について「困り感」の高い機関を対象とした調査を行ったことで、他機関にも援用しやすいものと思われる。

③国内外の先進的な実践について、文献や視察調査等で把握できたことで、今後の取り組みに役立てることができる。

一方、課題としては、試行的な取り組みが主であり、子ども本人や家族に関する個人情報の扱いを慎重にする必要性があったことから、一般公開に向けてさらに準備や調整の必要な結果があることが挙げられる。

また、思春期を中心に検討したものの、本調査から幼少期の課題、とくに養育者とのアタッチメントや成育環境の影響が非常に大きいことが把握されたことから、幼児期の研究も進めていく必要があると考えられた。日本では、幼児期にみられる性行動の特徴や発達に関する研究がほとんどなされておらず、健全な性行動であるのか逸脱した行動とみられるのか、判断するための指標がないのが現状である。本研究から、そうした基礎的な資料の有用性も指摘することができる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 20 件）

①<u>野坂祐子</u>，フィンランドにおける性教育の取り組みと専門家養成, 性の健康, 査読無, Vol.17，No.1，2018，25-28.

②<u>野坂祐子</u>，臨床に活きるトラウマインフォームド・ケア（2）時を超えるトラウマ―過去にならない記憶, こころの科学, 査読無, No.198，2018，97-101.

③<u>野坂祐子</u>，臨床に活きるトラウマインフォームド・ケア（1）トラウマの「レンズ」を通して見えるもの, こころの科学, 査読無, No.197，2018，8-12.

④<u>野坂祐子</u>，危機介入とコンサルテーション～児童養護施設内での子どもの性問題行動への対応, 家族心理学年報, 査読無, Vol.35, 2017，100-108.

⑤<u>野坂祐子</u>，思春期の性問題行動とその支援, 新教育課程ライブラリⅡ，査読無，vol.5, 2017，12-13.

⑥<u>野坂祐子</u>, 対人関係における暴力の「被害」と「加害」, こころの科学, 査読無, No. 188, 2016，73-78.

⑦浅野恭子・<u>野坂祐子</u>，子どもの性問題行動の理解と支援―アタッチメントとトラウマの観点から―，トラウマティック・ストレス, 査読無，第 14 巻，第 1 号，2016，47-55.

⑧<u>野坂祐子</u>・浅野恭子，児童養護施設におけるトラウマインフォームド・システムの構築 ～子ども間の性問題行動への理解と再発防止に向けた取組み～，学校危機とメンタルケア，査読無，Vol.8，2016，60-78.

⑨<u>野坂祐子</u>，子どものトラウマ治療と支援―回復を支える関係性と環境づくり，発達, 査読無，Vol.145，2016，24-28.

⑩<u>野坂祐子</u>，子どもの性的発達と性問題行動－被害-加害の連続性とグッドライフ・アプローチ, 子ども学, 査読有, 第 3 号， 2015, 55-72.

〔学会発表〕（計 6 件）

①山本恒雄・<u>野坂祐子</u>，性的虐待を受けた子どもの初期対応とケア，日本子ども虐待防止学会 第 23 回学術集会ちば大会，2017，東京ビックサイト.

②<u>野坂祐子</u>，知的障がいのある子どもの回復と自立をめざす支援学校での取り組み，第 16 回 日本トラウマティック・ストレス学会，2017，武蔵野大学.

③<u>野坂祐子</u>, TC における当事者の被害性と加

害性の共有と葛藤，第 15 回日本トラウマティック・ストレス学会，2016，仙台国際センター.

④野坂祐子，性被害を受けた子どもや保護者に対する心理教育 ～教材の開発と評価から～，日本子ども虐待防止学会 第 22 回学術集会おおさか大会，2016，大阪国際フォーラム.

⑤ Nosaka Sachiko, Intervention for children and youth who have sexual behavioral problems in community, Asian Criminological Society, 8th Annual Conference（アジア犯罪学会 第 8 回大会），2016，中国・北京.

〔図書〕（計 3 件）
①野坂祐子，日本性教育協会，性について、語る、学ぶ、考える，2017，18-21.

②野坂祐子・浅野恭子，誠信書房，マイステップ：性被害を受けた子どもと支援者のための心理教育，2016，158（全頁共同執筆）

③野坂祐子，金剛出版，アディクションと加害者臨床，2016，50-64.

〔産業財産権〕
なし

〔その他〕
ホームページ等
「子どもの性の健康研究会」
http://csh-lab.com/

６．研究組織
(1)研究代表者
野坂祐子（NOSAKA　Sachiko）
大阪大学大学院人間科学研究科・准教授
研究者番号：２０３７９３２４

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
（児童相談所等の行政職員等のため非公開）